「熱帯林業」旧誌のこと

―北野至亮氏を追悼して―

緒　方　　健

「熱帯林業協会」およびその機関誌「熱帯林業」の発行を支えつづけ，第 3 代熱帯林業協会々長の塩谷　勉氏をして“熱帯林業の北野か，北野の熱帯林業か”[6] といわしめた北野至亮氏が，昨年（2006 年）12 月に 94 歳で亡くなった。協会に関係されてきた方々の多くはすでに亡くなり，あるいはご高齢であるので，北野さん（と呼ばせていただく）を偲びつつ僭越ながら熱帯林業誌のことなどについて，ここに書かせていただきたい。

「熱帯林業協会」設立総会が 1966（昭和 41）年 6 月 24 日に虎ノ門共催会館で開催され，規約の審議，役員選出などが行われたことが「熱帯林業」創刊号の巻末に記されている。そのちょうど 1 年前の 6 月，有志による「熱帯林業研究会」がつくられたが，それが発展して正式の組織となったのが熱帯林業協会である。協会の規約は 8 章 27 条からなり，また役員には会長として三浦伊八郎氏（大日本山林会々長），副会長として坂口勝美氏（農林省林業試験場々長）および千田文七郎氏（ギングー貿易監査役），顧問として東畑精一氏（アジア経済研究所長）をはじめとする 8 名，他に常任理事 7 名，理事 26 名，監事 2 名を置くという錚々たる顔ぶれの組織であった。熱帯林には豊かな資源と旺盛な成長力があり，これの利用拡大および未利用資源の開発と活用がわが国にとっても重要であるとともに，熱帯諸国からも要求されている，というのが協会設立の趣旨であった[1]。協会事務局は当初，千代田区永田町の全国町村会館にあった帝国森林会内に置かれたが，間もなく大日本山林会のある虎ノ門の三会堂ビルに移り，以後そこに落ち着いた。

熱帯林業協会が設立された当時は，日本の木材輸入とりわけ南洋材の輸入が急増していた（図 1）。増伐を重ねたフィリンピン・ミンダナオ島のラワン資源

Ken Ogata : About “The Tropical Forestry” (Old Series), with Special Reference to the Memory of Mr. Shiryo Kitano

(財)林業科学技術振興所

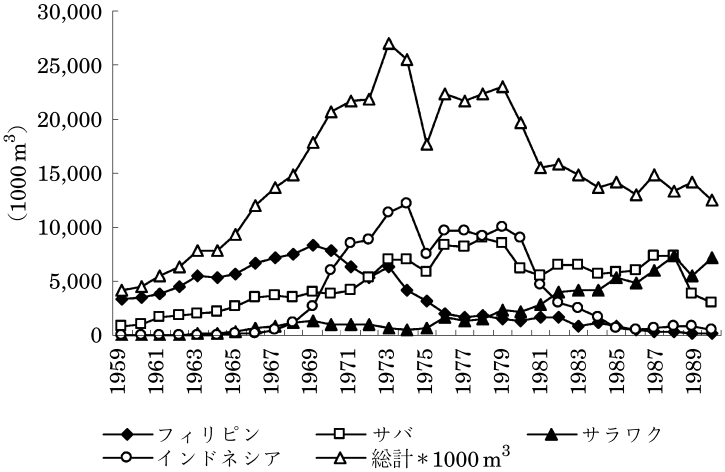

図 1　南洋材輸入量（丸太・製材込）（林野弘済会：日本林業年鑑より）

に限界が見えはじめ，輸出先がマレーシアのサバおよびインドネシアのカリマンタンへ徐々に移行するとともに，日本の多くの企業が現地に進出しつつあった時代であった。また「熱帯林業開発 FAO 委員会」が設立（1966 年）され[2]，熱帯林の取り扱いが国際的な問題になろうともしていた。このような情勢の中で，熱帯林業協会は必然的に設立されたといえる。

常任理事兼事務局長の北野さんが最も苦労されたのは，協会の運営であった[7]。運営費は会費（年会費は当初正会員 1,000 円，賛助会員 10,000 円とされた），事業収入，寄付金でまかなわなければならなかった。これは大変なことであったと思う。そうはいうものの，北野さんにとっては 50 代半ばにさしかかる脂の乗りきった時期で，次々に企画を立て，実行することでその困難を乗り越えられた。

北野さんは旧制第四高等学校から東京大学林学科に進み，卒業（昭和 13 年 3 月）後は日産農林工業(株）に就職，すぐに英領北ボルネオ（現マレーシア・サバ州）のタワオ（Tawau）にある同社農場（元，久原農園）に赴任し，終戦時までそこに勤務された。帰国後も日産農林に勤めておられたが，定年を待たずして退職，少しの間浪々の身でおられたように思う。ご自身のことは私などにはほとんど話されなかったので，この辺のところはよくわからないが，硬骨漢のことゆえ，会社の方針と合わないということもあったらしい，とこれは筆者

の想像である。ただタワオ時代のことだけはいつも懐かしがられ，自ら「タワオ会」を主催し，毎年のように会員（タワオ時代の同僚および家族）とともにタワオ訪問をくり返されていた。これは北野さんの晩年の頃まで続けられた。

東南アジア熱帯における林業，林産業は戦前からも行われていたが，それはフィリピンのラワン材のほかゴム，ヤシ油，マニラ麻などの特用林産物を中心とする量的にも限られたもので，かつ戦中，戦後の混乱期のため一時衰微していた。それが木材の大量輸入にともなう企業の南方進出によって急激に発展しだしたのだが，実際には熱帯林のことがわからず，困っていた企業も多かったようだ。北野さんは“自分こそ熱帯林を知っている”という自負とともに熱帯林についての正しい知識を伝えなければならないという責務を感じていた[7]。そんな北野さんにとって，熱帯林業協会の設立，参画は満を持しての登場ということであっただろう。

まず協会の規約に則り，「熱帯林業」の第 1 号が早くもその年の 9 月に発行され（図 1），やがて 1 月，4 月，7 月，10 月の年 4 回の発行となった。号が進むにしたがって読者を念頭に置いた記事の工夫が加えられ，総説，特集，随想，熱帯林の知識，報告・紹介，資料，協会だよりという形式が定着した。編集委員には農林省林業試験場のほか大学，民間からの者がたずさわり，林業試験場経営部長の原　敬造氏がずっと委員長を務められた（原氏は協会の副会長もされている）。しかしはじめは熱帯を直接知っている者や研究者が少なく，記事集めにも苦労があり，どうしても翻訳物，紹介記事などが多くなった。賛助会員（特別会員）は数十社の企業中心に出発しやがて 170 社近くに達しているが，この会員維持も一苦労で，そのため「熱帯林業海外情報」など様々な配布資料が絶えず作成された。

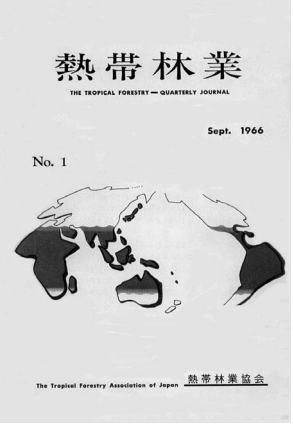

図 2　淡黄色の地に，熱帯圏が赤く塗り分けられている

しかし会員の年会費だけでは協会は維持できない。それで講演会，講習会，研究会，海外研修旅行，巡回診療，コンサルタント事業などが盛んに行われた。協会設立の年の 11 月にはすでに講演会が開催されている。また講習会は熱帯林の生態，伐採，造林などのほか，とりわけ木材の識別講習会が頻繁に行われたが，これは熱帯林開発が進むにつれいわ

写真 1　熱帯植物学者 W. Meijer 氏と談笑する北野さん

ゆる未利用材というそれまで知られていなかった樹種が増え，輸入業者側，利用者側からもそれに対する知識が求められたためであろう。海外研修旅行は東南アジアの熱帯林見学ばかりでなく，オーストラリア，ニュージーランド，インド，ネパール，中南米，アフリカに及び，いずれも 20 日間前後の豪勢な旅であった。巡回診療については，東南アジアとりわけカリマンタンに多くの日本人を派遣している企業にとって非常に待ち望まれたことであった。診療団の医師の中心になったのは，今日寄生虫学で著名な藤田紘一郎氏（現東京医科歯科大学教授）で，各回数十日規模で毎年のように行われた[3,10]。またコンサルタント事業としては，企業からの依頼のあった熱帯林の調査を，多くは北野さん自身が行った。まず空中から対象とする森林の全体を把握し，次に現地に入って毎木調査を含めた詳しい調査を行うという大変な仕事であった。そのようにして，北野さんは熱帯林業誌の発行および各種事業の合間をぬって熱帯を中心に毎年数回各地に出かけるというきわめて多忙な日々を過ごされたけれども，それこそ自分の思う道なので，生き生きとされていた。

しかし急激な熱帯林の開発は当然資源の枯渇を招く。それはたちまちのうちにやってきた。熱帯林業誌においても，「これからの熱帯林業－その在り方」という 1973 年 1 月号の特集記事で官・学・民 7 者の意見を載せているが，その中で吉良竜夫氏は“技術革新以後の強力な土木技術にまかせて，赤道をめぐる地球の緑の帯を，ひらきつくしてしまってよいのだろうか”と警告を発している[4]。それでも熱帯林開発の勢いは止まらず，やがてサバからインドネシアのカリマンタンへと開発の中心が移っていった。それは南洋材利用にどっぷり浸かった日本ほかの輸入国側と，経済発展を優先する輸出国側の利害が一致したためであろう。

しかし情勢は開発協力といっていた時代から技術協力の時代へと移りつつあった。すでに 1974 年には JICA（国際協力事業団，現国際協力機構）が設立され，ECAFE（国際連合アジア極東経済委員会）においても丸太生産国（途上

国）と消費国（先進国）の諸問題が論議されている[5]。また同年，SEALPA（東南アジア木材生産者会議）が結成され，南洋材生産国間で話し合いが進められるようになった。このような流れの中で，1980 年前後から生産国側の丸太輸出規制が強まりだした。とくに石油を産し，木材輸出に頼る割合が少ないインドネシアは，自国木材産業育成の目的で，全面的に丸太輸出禁止の措置をとるようになった。そのためインドネシアに進出していた日本の木材関係の企業は，現地から引き上げざるを得なくなってしまった。

熱帯林業協会はいわば日本企業が熱帯で活躍するために設立された協会であったから，現地からの企業の撤退によって存続の意義が薄くなり，1984 年 3 月をもって解散することとなった。この辺のところは協会内部で大いに議論されたところであろうが，私は知る由もない。熱帯林業誌も 72 号が最終号となった。この号の最後の「熱帯林業の火は消したくない」で，北野さんは“時世は容赦なく移る。華華しく挑んだ熱帯林のチェンソーの響きが，原生林を圧した時代はもう過ぎつつある”と述べている[7]。1966 年から 1984 年にいたるこの 18 年間はまさに激動の時代であった。

余談ながら，筆者は数年前サバの森林を 35 年ぶりに訪れ，以前の森林とあまりの変わり様に驚かされた。世界一の熱帯林といわれたサンダカン周辺の森林が，見る影もない二次林になっていた。林が残っているところはまだいい方で，平地林はほとんど開発されて海岸から奥深くまでオイルパームの畑になっていた。かつて“オランウータンが一度も木から降りずに東の端から西の端まで行くことができる”と例えられたボルネオ島だが，わずか数十年の間に多くの森林が消えてしまった。サバでは 1960 年代の半ばからそれ以後の 30 年間に面積的に約 30% の森林が失われたとされているが，実質的な森林の損失ははるかにそれを上回るであろう。熱帯では樹木の成長が早く，植生もすぐに回復すると考えられたのは一種の妄想に過ぎず，実際は有機物の分解が速いから表層土が薄く，いったん樹木が伐採されて地面がむきだしになると，激しい降雨でたちまちに養分を含んだ表層土が流されてしまう。そうでなくても，天然林内でラワンが直径 1 メートルになるのに約 200 年かかるというフィリピンでの研究報告もある。熱帯の森林は一度破壊されると回復がむずかしい。これからどうなるのであろうか。

熱帯林業誌最終号にある北野さんの「熱帯林業の火は消したくない」をうけて，すぐに行動を起こしたのは農林水産省林業試験場の造林部長であった浅川澄彦氏である。「新シリーズ」発刊前後のいきさつは編集委員会の名のもとで浅

川さんが書かれた『「熱帯林業」の火を引き継いで』で知ることができる[8]。海外林業コンサルタンツ協会がスポンサーになってくれたものの，北野さんのような専従者がいないから，最初は原稿依頼から印刷，さらに発送にいたるまで，浅川さんの指揮のもとアルバイトの手伝いを得てつくば学園都市へ移転した林業試験場内で行うという状況だった。ともかく，熱帯林業協会が解散した年の10 月に新シリーズ No. 1 の発行にこぎつけたのは，浅川さんならではのことであった。

新シリーズは，表紙の色（淡緑色）と地図のデザインが少し変わっただけで，サイズも A5 版のままである。ただし発行は年 3 回となり，記事の内容もかなり異なってきたように思う。ひとつには当然ながら企業色が薄れたこと，またわが国でも熱帯林の研究が進み，さらに国際交流が盛んになって，研究者が多く熱帯圏に出かけるようになったこと，とくに JICA や JIRCAS（熱帯農業研究センター，現国際農林水産業研究センター）のプロジェクトで海外に長期出張する研究者が増えたことなどにより，借り物でない記事が多くなった。その分，読み物的記事は少なくなったが，内容はますます充実してきたといえよう。

このほか林野庁の海外林業協力室が中心になって「海外林業研究会」が設立され（1987. 1）[9]，熱帯林業誌に「会員の広場」欄が設けられたこと，(財)国際緑化推進センターの設立にともなってそこに刊行元が移ったこと[11]など，書くべきことは多いが，それは熱帯林業誌をひもといていただけばわかることなので，この辺で終わりとしたい。

〔**参考文献**〕 1） 三浦伊八郎（1966）発刊の辞，熱帯林業 No. 1, p. 2 ほか. 2） 坂口勝美（1969）熱帯林業の開発に関する FAO 委員会の動き，熱帯林業 No. 14. 3） 藤田紘一郎（1971）インドネシア疾患風物詩（1），熱帯林業 No. 19，1-16. 4） 吉良竜夫（1973）熱帯林の将来―開発か保全か，熱帯林業 No. 27，5-6. 5） 神足勝浩（1974）我が国の途上国森林への対応，熱帯林業 No. 34，11-15. 6） 塩谷 勉（1984）解散の御挨拶熱帯林業，No. 72，1-2. 7） 北野至亮（1984）熱帯林業の火は消したくない，熱帯林業 No. 72，59-62. 8） 編集委員会（1984）「熱帯林業」の火を引き継いで，熱帯林業 N.S. No. 1，巻末. 9） 三沢 毅（1987）会員の皆様へ，熱帯林業 N.S. No. 8, p. 67. 10） 藤田紘一郎（1988）熱帯医学の最近の話題（1）熱帯林業開発事業地における健康管理，熱帯林業 N.S. No. 13，36-38. 11） 秋山智英（1991）読者の皆様へ，熱帯林業 N.S. No. 22, p. 2